

Museum News

秋田県立博物館ニュース

収蔵資料紹介（工芸部門）

刀 銘（表） 應需小野正秋氏秋田住延重作之
（裏） 昭和二十年二月日

延重は、本名岩崎岩次郎といい、秋田市榑山で昭和17年から20年まで作刀しました。秋田における昭和の作刀を支えた刀工のひとりです。今回その貴重な一振りを、親族の方から寄贈していただきました。

目 次

表紙・目次 P. 1
企画展紹介	
（紹介） 植物を編む -暮らしの中の編組- P. 2
（報告） 鳥海山の自然史 P. 3
企画コーナー展紹介	
（報告） 後藤宙外と書簡 ～「文壇との交流」と「生涯」～ P. 4
（報告） 真澄企画コーナーにおける展示 P. 5
学芸ノート	
（生物部門） 金属鉱山跡地の植生について P. 6
（考古部門） 土器底面敷物圧痕の世界 P. 7
平成 30 年度展示予定 P. 8



企画展 植物を編む

—暮らしの中の編組—



編組品とは、樹皮や蔓、草などの植物を素材として、編んで形作ったもののことをいいます。ザルやカゴなど調理や運搬用具として、かつては人々の暮らしを支える大切な道具でした。県内において編カゴの断片などが発見されていることから、その起源は縄文時代にまで遡ることができます。しかし昭和30年代以降、プラスチック製品が普及するようになると、手間ひまのかかる編組品の需要は減り、その作り手も次第に姿を消していきました。

そこで、失われつつあるかつての暮らしの道具、編組品の価値を改めて問い直そうと本展示を企画しました。今回の展示における調査の中で、地域によって植物素材の選択には傾向があり、また素材の特徴に見合った技術が用いられていたことがわかりました。そこには長い時間の中で培われた先人の知恵と手仕事の技を見て取ることができます。編組品の編み目や造形としての美しさという側面からも楽しんで頂こうと、会場やポスターのデザイン、展示方法にもこだわりました。展示では県外からもたくさんの方々にお越しいただきました。



秋田県内において編組品が産業となり発展した地域を紹介



昭和30年代の職人の家を再現、あけびづる細工と六郷ざるの技術を映像で紹介



本間一恵氏による編組技術の指導

展示構成

- 第1章 植物から生まれる編組品
- 第2章 あきたの編組品
- 第3章 素材となる植物 形づくる技術
- 第4章 編組品からみた地域の特徴
- 第5章 つながる手仕事

展示関連イベント

- 講演
「縄文時代から続く植物利用 —暮らしの中の編組—」
12月16日(土)
講師：佐々木由香氏(明治大学黒曜石研究センター/パレオ・ラボ)
- ワークショップ
「古に学ぶ—縄文時代の編組技術—」
12月16日(土)
講師：本間一恵氏(バスケットリー作家)
- 講義&ワークショップ
「ヤマブドウのつるで編む」
2月11日(日)
「オニグルミの樹皮で編む」
2月25日(日)
講師：斉藤洋子(当館学芸主事)
- 実演
「伝統の技と美～中川原信一氏によるあけびづる細工～」
3月18日(日)
- 講演
「編組品にみる暮らしの造形」
3月10日(土) 10:30～12:00
講師：工藤員功氏
(柏市文化財保護委員)
元武蔵野美術大学民俗資料室専門員
- 喫茶DE対談
「編組品から読み解く知恵と文化」
3月18日(日) 10:00～11:30
話者：中川原信一氏(あけびづる細工職人)
×伊藤征一郎氏(カゴアミドリ)
進行：斉藤洋子(当館学芸主事)

(工芸部門 斉藤 洋子)

weaving plant fibers weaving for daily life



企画展 鳥海山の自然史

秋田県と山形県にまたがる鳥海山は、その出で立ちから出羽富士とも呼ばれ、また、秋田県民歌に「秀麗無比なる 鳥海山よ」と歌われているように、秋田を代表するものの一つに挙げられます。しかし、鳥海山は気象庁が常時観測を行う活火山の一つであり、何度も噴火を繰り返し、その活動により現在の鳥海山とその周辺の地形、自然環境が形成されました。その豊かな自然環境は国定公園として整備され、2016年には「日本海と大地がつくる水と命の循環」をテーマとした「鳥海山・飛島ジオパーク」としての認定もされています。

火山としての鳥海山は、約60万年前に活動を開始し、3つの活動期を経て、現在のような形になりました。紀元前466年には山体が大きく崩壊し、その土砂は岩なだれとなって木々をなぎ倒し平野を埋め立て、日本海まで達しました。にかほ市には小さな丘が点在していますが、これらは岩なだれによって運ばれた鳥海山の溶岩の一部で「流れ山」と呼ばれています。また、この岩なだれの土砂により、山麓の北西部の森林が広範囲に埋没しました。埋没した木は「埋もれ木」と呼ばれ、以前から冬師・釜ヶ台地域で掘り出され「神代杉」として珍重されていました。最近の高速道路の工事で約150本の埋もれ木が出土し、ケヤキ、クリ、コナラ類が多いことから、落葉広葉樹を主とした森林だったと考えられます。



岩なだれの範囲



発見された埋もれ木の一部



元滝伏流水

鳥海山は雄大な裾野を海に広げ、いたる所から豊富な湧き水が流れ出て人々にとって恵みの山となっています。この湧き水は、鳥海山に降った雨や雪が隙間の多い溶岩の間に染みこみ、長い年月を経て溶岩流の末端などに現れたもので、一部は海岸や海底からも湧き出しています。

にかほ市にある獅子ヶ鼻湿原は、この鳥海山の豊富な湧き水により成立した湿原で、世界的に貴重なコケが群生しており、ハンデルソロイゴケとヒラウロコゴケからなる「鳥海マリモ」はこの獅子ヶ鼻湿原でのみ見られるものです。

鳥海山には様々な生き物が生息していますが、もっとも代表的なのは国の天然記念物に指定されているイヌワシです。国内での生息数は600羽程度といわれていますが、年々少なくなってきています。国は法律による規制で保護に取り組んでおり、また、秋田市大森山動物園では40年以上にわたり研究を続け、飼育・繁殖に成功しています。

また、鳥海山は独立峰で、他の高い山から離れているため、隔離されて別種へ変化したとみられる昆虫もあり、最近新種として命名されたチョウカイトガリヤマゾウムシがその例として挙げられます。



イヌワシ

(地質部門 鈴木 秀一)

平成29年度 秋田の先覚記念室 企画コーナー展

後藤宙外と書簡

～「文壇との交流」と「生涯」～

展示構成

- 1 生い立ち
- 2 宙外誕生
- 3 宙外上京・学生時代
- 4 小説家、編集者として
- 5 帰郷



後藤宙外（1866～1938年）

後藤宙外は、払田柵跡の発見者として博物館では紹介されていますが、作家や評論家、文芸誌の編集者など多彩な才能を持ち、明治期から昭和初期に活躍した秋田を代表する先人です。

宙外は、慶応2年（1866）に秋田県に生まれ、現在の大仙市で幼少期を過ごしました。明治22年（1889）には東京専門学校（現 早稲田大学）に進みます。学校では、坪内逍遙はじめ多くの人々に会うこととなりますが、時の文豪夏目漱石も在職しており生徒と教師の関係にあったと言われています。今回の展示では、「漱石全集」に未登録で、平成29年5月に注目を集めた書簡についても同時に展示しました。

本展示では、小説の自筆原稿や書簡類を中心に約70点ほどの資料を展示しましたが、夏目漱石、森鷗外、正岡子規から送られた葉書や書簡は、観覧者の皆様に関心をもって観ていただくことができました。



夏目漱石書簡



展示風景

（秋田の先覚記念室 池端 広樹）

真澄企画コーナーにおける展示



平成29年5月23日(火)～6月11日(日) 自筆本、春の特別公開
秋田の旅14冊

菅江真澄による著作の中心資料となっている重要文化財「菅江真澄遊覧記」89冊は、かつて藩校明德館に納められたもので構成されています。これまで、秋田の歴史や文化を知り、また、他地域を知る書物として読み続けられてきました。その一方で、遊覧記の特色の一つである彩色された図絵は、なかなか見ることができないのが現状です。同資料が当館の寄託資料になっていることから、所蔵者の御理解を得て、年次計画を立てて公開することにしました。公開は3週間とし、1週間ごとに開帖部分を替えて紹介しました。

(展示資料)

男鹿の秋風、みかべのよろい、かすむ月星、おがらの滝、ひなの遊び、氷魚の村君、男鹿の秋風、男鹿の鈴風、男鹿の島風、男鹿の寒風、軒の山吹、勝手の雄弓、月のおろちね、阿仁の沢水

平成29年7月15日(土)～8月27日(日) 第73回企画コーナー展
高橋友鳳子旧蔵コレクションと真澄

横手市増田生涯学習センターには、増田町教育長などを務め、俳人としても知られた高橋友蔵(俳号：友鳳子、1899～1996)の旧蔵コレクション約6,700点があります。コレクションの中には俳句や短歌に関する資料が多く、稀覯本も少なくありません。その他、蔵書票や豆本類もこのコレクションを特色づける資料となっています。菅江真澄資料センターでは、これまでの展示で俳諧や歴史関係の資料を紹介してきましたが、今回は、コレクションの中から真澄に関連する資料を紹介しました。

(展示構成)

1. 真澄がつくった発句 2. 真澄の記録にまつわる俳諧書 3. 秋田の俳諧史を彩る書物 4. 真澄と周辺人物の短冊(菅江真澄、高階貞房、進藤俊武、吉川忠行、吉川五明、国谷金馬) 5. コレクションの中の軍記物 6. 真澄研究史上の人物と図書・資料(内田武志、石川理紀之助、深澤多市、柳田国男)

(資料紹介)

1で紹介した2冊の俳諧書には、それぞれ俳号「真寿身」の句が載っています。『俳諧法華』(文政2年、1819)の「うかれ出て迷はば迷へ江戸の春」、『さよの月』(文政3年)の「暦より四五日はやき寒さかな」が、菅江真澄の句と考えられています。

平成29年9月20日(水)～10月9日(月) 自筆本、秋の特別公開
雪の出羽路平鹿郡14冊

春の特別公開と同様の趣旨で、真澄による本格的な地誌の最初となった《雪の出羽路平鹿郡》全14巻を紹介しました。公開は3週間とし、1週間ごとに開帖部分を替えました。

平成29年10月14日(土)～12月10日(日) 第74回企画コーナー展
雑纂資料の魅力

菅江真澄には、下書きや覚え書き(メモ)、未完成の文章などを綴じ合わせた書冊があります。『菅江真澄全集』では、これらを「雑纂」として分類しています。雑纂資料は、まとまった記述ではないため、現代語訳を施されることもなく、ふだんは注目されることがありません。一方で、雑纂資料には、そこにだけしか書かれていない文章があるなど多くの魅力が潜んでいます。展示では、大館市立栗盛記念図書館が蔵する10点の資料を中心に取り上げ、雑纂に分類される資料の魅力を紹介しました。

(展示資料)

風の落葉一、風の落葉三、風の落葉四、椎の葉、高志栗、混雑当座右日鈔、都由野塵束、風野塵泥、筆のしがらみ、陸奥国毛布郡一事(全冊とも県指定文化財「菅江真澄著作」)

※企画コーナー展、春・秋の特別公開の合間には、「収蔵資料の紹介」の展示をおこなっています。

※展示については、解説資料(館内印刷)を発行しています。当該年度は常備していますので、お立ち寄りの際にお持ちください。

(菅江真澄資料センター 松山 修)

金属鉱山跡地の植生について

秋田県内には多数の金属鉱山がありました。山の奥が作業従事者でにぎわいをみせた時期は過ぎ、現在では全ての鉱山が閉山しています。人が入らなくなった場所も少なくありません。教科書では、「人が植物を伐採または耕地化した土地は、遷移し森林に戻る」と習いますが、鉱山跡地でも、それはあてはまるのでしょうか。人が手をかけなくなった跡地の現在の状況を把握するべく、生物部門では「川口鉱山跡地の植生と土壤重金属^{*}」の調査を行っています。

<川口鉱山>

川口鉱山は、秋田県大仙市太田川口にあった鉱山です。その跡地は観光名所の一つである川口渓谷の最も奥に位置しています。良質の銅が採れ、江戸時代から昭和20年代まで何度も開発されていますが、起伏の激しい山中に位置するため、幾度も土砂崩れなどで経路が封鎖され、その度に整備がなされた場所でした。現在は稼働しておらず、鉱山跡に行くためには川口渓谷にそった林道を6kmほど歩かなくてははいけません。

この一帯の山は和賀山塊とよばれ、20年前には地元の有志を中心に結成された和賀山塊学術調査会によって様々な生物群について報告がなされています。山を熟知している調査会の方々に過去の景観や植生についての話を伺うとともに、協力を得て一緒に跡地を踏査しています。

<金属鉱山跡地の環境>

金属鉱山とは、銅山や銀山など金属を掘り出した鉱山をさします。鉱山周辺の土壤はもともと含有する重金属濃度が高いのですが、開発後は鉱山廃水などの影響を受け、開発以前よりも高くなっていることが予想されます。土壤に高濃度の重金属が含まれると、多くの植物では生長が阻害されて、枯れたり小さくなったりします。そのため同緯度・同高度の場所であっても、違う植生になります。

<金山草：ヘビノネゴザ>

跡地周辺には、ヘビノネゴザが群生しているところがたくさんあります。ヘビノネゴザは鉱山跡地でよく見られるシダ植物で、別名「金山草」とよばれます。山師が鉱脈（金山）を見つける時に参考にしたとも伝えられる植物です。ヘビノネゴザは他の植物に比べて重金属への耐性があるため、重金属濃度の高い鉱山周辺の土壤でも生育できます。

鉱山跡地の土壤重金属濃度を測定し、その影響を受けてどのように植物が分布しているのかを記録して、跡地の現況を確認しています。

(生物部門 浅利絵里子)



鉱山跡地の土壤。ヘビノネゴザが多数みられる。

^{*}重金属…鉄、銅、亜鉛、カドミウムなどの比重が比較的大きい金属。一般に鉱山周辺土壤では含有量が多い。

土器底面敷物圧痕の世界

奇抜なプロポーションや繊細な文様が目を引く縄文土器。普段は皆さんの目に触れない土器の底に、実は様々な敷物の痕跡が残っていることをご存知でしょうか。ここでは縄文土器を中心に、底面の敷物圧痕についてご紹介します。

そもそもなぜ土器の底に敷物の跡が残っているのでしょうか。博物館教室などで土器作りにチャレンジしたことのある方ならお気づきかもしれません。底に敷物がないと材料の粘土が作業台にくっついて、とても扱いくっついてしまうのです。縄文時代の人々もおそらく同じような経験から、敷物の上で土器を作ったと考えられます。こうして土器の底に付いた敷物の跡がそのまま消されずに焼き上げられることによって、敷物圧痕が残るわけです。

敷物圧痕が注目されたのは E. S. モース氏が 1879 年に発表した『大森介墟古物篇』まで遡り、大森貝塚から出土した土器底部の編物圧痕が「mat impression」として紹介されています。敷物圧痕の研究は、日本初と言われるこの考古学的発掘とともにスタートしたと言っても良いでしょう。その後、発掘調査の増大とともに日本各地で膨大な資料が蓄積され、植物の葉、ホタテ貝、鯨の椎骨など様々な敷物圧痕が確認されています。とりわけ編物の圧痕は、遺跡から出土する実物資料が少ないことから重要視され、敷物圧痕研究の中心となりました。平成 29 年度企画展「植物を編む」では、現代の編物とともに、土器底部の敷物圧痕を展示しました。秋田県にはどのような敷物圧痕があるのか、実際の出土例を交えながら見ていきたいと思ひます。

秋田県内の敷物圧痕は、資料の極めて少ない草創期、底の尖った形の土器が主流である早期については良く分かっていません。平底が一般化する前期中頃か

らみることができ、鹿角市三ヶ田館跡出土例には、縄目編みと呼ばれる編物の敷物圧痕が認められます。また、敷物圧痕ではありませんが、底面に縄文の付けられたものがあり、注目されます。実は前期の初め頃にも平底の土器はあるのですが、敷物圧痕は無く、縄文が付けられたり、あたかもカゴの底の様な文様が描かれていたりするのです。平らな土器の底にわざわざ文様をつける行為は、底が尖っていた頃の土器作りの名残かもしれません。

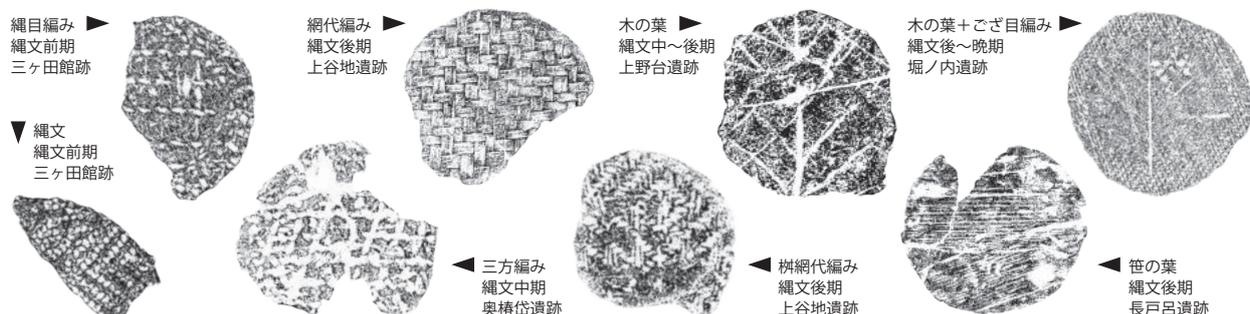
前期後半から中期初めにかけての時期は、敷物圧痕が非常に目立たなくなります。秋田市蟹子沢遺跡出土例には、底が平らに磨かれ、編物の圧痕が微かに見えるものがあります。敷物は使うけれども、その痕跡は消し去るという土器作りの風潮があったようです。

中期後半から後期前半にかけて、敷物圧痕資料は格段に多くなっていきます。木や笹の葉の圧痕がよくみられるほか、編物圧痕は縄目編みに加えてご目編み・網代編み・三方編みなど、編み方の種類は実に豊富です。

後期後半から晩期の資料では、湯沢市堀ノ内遺跡出土例に、木の葉の圧痕と編物あるいは異なる編物同士が重なり合ったものがあり、注目されます。敷物から一旦剥がし、再び別の敷物に乗せることで圧痕が重なると考えられますが、そんなところに当時の土器作り工程を考えるヒントが隠されている気がします。

敷物圧痕は、遺跡に残りにくい様々な敷物の写しとして重要なばかりでなく、土器作りの風潮をも反映しているようです。資料は膨大にあり、丹念に見ることでもまた新たな発見が出てくることでしょう。私はこの奥深い世界に足を踏み入れたばかり。調べることはまだまだありそうです。

(考古部門 加藤 竜)



平成30年度 展示予定

企画展示室

企画展

あきたびじょん セレクション

— 秋田をみつける9のテーマ —

博物館のさまざまな分野の資料から、秋田の姿を「発見」する展示です。

4月29日(日)～6月22日(金)

特別展

あきた大鉄道展 HE-30系

共催：JR東日本秋田支社

鉄道のダイナミズムと楽しさを伝える展示です。

7月14日(土)～8月26日(日)

企画展

菅江真澄、記憶のかたち — 没後190年記念展 —

地域の歴史・文化などを呼び覚まし、未来へと引き継ぐ「記憶のかたち」。真澄の自筆資料を紹介します。

9月22日(土)～11月4日(日)

アイヌ文化振興・研究推進機構巡回展

キムンカムイとアイヌ

アイヌ文化振興・研究推進機構所蔵の工芸品などにより、ヒグマと強く結びついたアイヌ文化を紹介します。

11月24日(土)～1月23日(水)

菅江真澄資料センター企画コーナー展

秋田の先覚記念室企画コーナー展

ふるさとまつり広場

- 天神人形
4月8日(日)～5月13日(日)
- 鹿島船
5月15日(火)～6月17日(日)
- 七夕絵どうろう
6月19日(火)～7月8日(日)
- 真澄とアイヌ
7月14日(土)～8月26日(日)
- あきた大鉄道展 付帯展示
7月14日(土)～8月26日(日)
- 菅江真澄、記憶のかたち
付帯展示
9月22日(土)～11月4日(日)
- 民族音楽の研究者 黒沢隆朝
9月29日(土)～11月25日(日)
- 遊覧記刊行の舞台裏
9月29日(土)～11月11日(日)
- キムンカムイとアイヌ
付帯展示
11月24日(土)～1月23日(水)
- ひな人形・押し絵
2月26日(火)～4月7日(日)
- 真澄の歩いた道「すすきの出湯」
3月16日(土)～5月12日(日)